

これは呆氣にとられながらも内心ホッとしました。

宮庭を眺めると、何と彼等伊太利兵数百名が嬉々としてバスケットボール大会をやっておる。国民性の違いとはいえ全く驚き入りました。われわれ日本軍は直ちに伊軍を集合させ、即時全武器を接収して彼等を山海関駅から貨車輸送により、北京の方面軍へ送りつけた。伊軍の家族たちが沢山出て来て、泣き叫んで別れを悲しむ姿に胸を打たれました。その後の伊太利軍はどうなったかかわれわれは知らない。

かくして尽きぬ回想に若き青春の年月を委ね、漸く五体無事で昭和二十一年一月二十六日、佐世保へ上陸、一月三十日懐かしい自宅に帰り着いて、母や家族と対面、復員完了しました。

内地帰還後、東京電灯へ復職し、二十三年結婚、子供三人、孫七人に恵まれ、有り難い太平の御世を楽しませて頂いております。

戦争が終わって、兵の、戦友の、その死が何の意味もなかったなんて思いたくない。この平和はあの尊い血潮の上に築かれた平和であるから。それだけになお

さら、大切にしたい。

息子達よ、孫達よ。

父親の、祖父の、つたない文章を、

戦争に生きた我々の青春の歴史をどんな気持ちで読んでくれるだろうか。

戦車第三師団工兵隊

河南作戦

埼玉県 小山 正三

私は第二国民兵でしたが、第二国民兵役も繰り上げ兵役に服することに改正になった新聞報道のあったその日に赤紙召集令状を受け取りました。当時私は二十九歳、妻と子供二人、材木関係の会社に勤めていました。

一期の検閲まで内地の原隊で教育を受け一等兵に進級、同時に蒙古の包頭の戦車第三師団の直協工兵隊に派遣されました。包頭に駐留中「ゴビ」砂漠の中の

「サモノテンスーム」で雲母の採掘という珍しい軍務に従事しました。

雲母は当時極めて貴重な鉱物として珍重された資源で「ノロ」や狐が棲息する極寒四十五度の荒涼たる丘陵地帯の作業でした。雲母は露天掘りで表土の花崗岩を爆破して採集し、一日三十フィートを採集する成果を挙げ、その代価当時の金額にして三十万円にも相当すると聞いてびっくりしました。雲母の層の中から美しい「ルビー」を発見することもありました。

初年兵はこの表土の除去の土工に明け暮れる辛い作業の毎日でした。昭和十九年三月、河南作戦が発動され、私達の工兵連隊は戦車師団の直協工兵隊として出動しました。五月初旬、黄河の大軍橋を霸王城で渡河、鄭州に集結。一斉に作戦発動、許昌に向かい南進が開始された。

許昌攻撃に当たっては戦車は城門突入等大活躍をした。その攻撃の支援に当たった工兵隊は埋設地雷帯の除去、対戦車壕の爆破による通路の開設等功績抜群であった。

許昌を占領した軍は敵主力を捕捉殲滅すべく進路を西に急転して臨除へ、ふたたび北進し洛陽へと向かって攻撃が続けられた。

この間敵は道路、橋梁、畑にまで地雷を埋設しており、工兵隊はこれを一々除去しては部隊の急進に間に合わないため、赤布の旗で標示しつつ前進したのであった。

私はこの作戦の間、工兵隊と戦車師団司令部の命令受領者稲田曹長の乗用車の運転手として働いた。道路上は戦車、トラック等車両が渋滞したため、任務上先行の必要に迫られた私の車は、道路を外れて畑の中を急進している時、私の車を追い越した車が私達のすぐ前方四く五十メートルの所で触雷、一瞬にして爆音と共に人も車も四散、私達は奇跡的に助かった。

洛陽に近い竜門街は数条の大地隙を利用した堅固な陣地で、この敵の攻撃では、強襲を敢行した部隊は大なる損害を受けた。ここでは我々工兵隊も銃を取り、歩兵の右翼に進出し、これと協力、敵陣地攻撃に加わった激戦であった。

次いで洛陽攻撃には、工兵隊は幅十二メートル、深さ八メートルに及ぶ巨大な対戦車壕を敵の集中射の中で爆薬と臂力で戦車突入路を開設、これを爆破するという偉功を奏したのであった。湘桂作戦では我々工兵隊は独立戦車第六旅団に配属され、軍公路を縦隊で進んだ。車両部隊は敵機の絶好な攻撃目標となり、人員車両に多くの損害が出た。昼は路外の森林等に遮蔽し、夜間に行進するパターンが繰り返される。

戦車旅団は、工兵隊の苦勞の積み重ねで出来た易俗河の重門橋で辛うじて渡河を完了し、衝陽攻略戦に参加することとなる。

私の運転する愛車「クログネ」小型乗用車は包頭出發以來、奇跡的にも故障も少なく、伝令車として走り続け、任務を成し遂げてくれた。この日故障修理を最終乗中、不意に敵機四機の襲撃を受けた。私は車のドアを開け路傍の山溝に取り付く。同乗者は反対ドアから飛び出し路の下の池の斜面に轉がり落ちて車から離脱する。ダーダーと敵機の射つ機関砲弾が身辺を掠めて過ぎていく。と同時に続く敵機が射ち込んで来た一

弾が車のガソリンに引火、バァーンと発火、車は焔に包まれるが手の施しようがない。敵機も去り、黒焦げの車内に千人針に包まれた妻と子の写真と郷里の神社のお守りだけが不思議に焼け残っていた。

部隊は桂林まで進んだが、その後反転、衝陽より南部粵漢打通作戦に参加することとなり、進路を転じ広東に向かうこととなる。この作戦中、部隊では腹痛を訴える兵が多発する。私も二三日前より胃が痛み出した。軍医の診断を受けたが「入院治療もよいが病院も食糧不足による栄養失調になる可能性が多いから、隊内で療養しろ」と診断される。この頃、口から回虫を吐いた兵がいたので原因は回虫と判明する。その他の農民の話から、「せんだん」の樹の皮を煎じて飲むとよいとのこと、早速飲用した。翌朝便の中から三十数匹の回虫が出たのには驚いた。

当日よりまた車に乗って戦列に加わった。腹痛は「ケロリ」。

昭和二十年二月頃のこの作戦の途中、ソ連軍の参戦が予想され、戦車旅団を急遽滿州へ移動することが企

画され、車両と列車で南支の奥地から北へ北へと移動を開始、八月十日天津に到着直後に終戦を迎えたのであった。

終戦後、中国軍の指示に従い盧溝橋の書備をしたりして昭和二十年の十二月内地に復員し、懐かしい妻子のもとに帰郷することが出来た。

我れ驚兵団で戦へり

東京都 清水 渡

私は山梨県生れです、兵庫県西宮市に移籍しました関係で驚兵団に入隊しました。入隊前には、東京在住の親戚の紹介で洋服屋に徒弟制度の年季奉公に入り、一人前の洋服仕立て職人になりました。が、当時は狭い日本より、大陸に新天地を求めて進出する若者が多く、私も青雲の志を抱いて単身で「一旗挙げてやる」の心意気に燃えて神戸の港より大連を目指して船出しました。

大連でロシア人の「ギョルミ」という男と知り合いになり、良い職業を世話してやるといわれ、雑貨商社の外交員になりました。満州鉄道沿線の都市を廻って販売しました。これが驚くほど良い商売で（雑貨物や書籍等）大変多額の金を手に入れました。しかしご存知のように、大陸は雨季が少なく空気が乾燥し、その上に砂漠からの黄砂（塵）が飛来します。私はそのために、身体（咽喉）を痛めて調子が悪くなり、僅か四か月で内地に引き上げて来ました。

大阪の東野田や桜宮の洋服屋にて職人（東京仕込）として腕を発揮しました。その後西宮の甲子園の西の津度の知人の家の二階を借りて、自営で洋服屋を開きました。戦争が激しくなり出したので、時代に即応した技術を身に付ける必要を感じ、尼崎の職業訓練所へ入所（第二期生）、工作科にて三か月勉強を行いました。

丁度昭和十七年一月四日に徴用令が来て、大阪桜宮の日立造船所に入所させられました。同所の各職種は番号にて分類していました。技術者は三千番台で私は